

草庵仏教

第242号
(発行日)

2010年8月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《聞法会ご案内》

○〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○聖典共学会――毎月6日。

午後7時より。

*8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

南無阿弥陀仏の意味

南無阿弥陀仏はどういう意味なのであろうか。

南無阿弥陀仏の意味を知る方法として、南無阿弥陀仏の六つの文字(六字)の上から、理解する方法がある。いわゆる六字釈である。それを親鸞聖人と蓮如上人の思し召しを通して伺ってみたい。

まず南無阿弥陀仏の六字を南無と阿弥陀仏にわけると、

南無という二文字はインド古典語である梵語の音写であるが、その意味は帰命である。また、阿弥陀仏の四字については、宗祖のご和讃に「撰取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる」とあって、撰取してすてないはたらきを阿弥陀(仏)というのであるとお示しになっている。

そこを蓮如上人は宗祖の思し召しから、お文に「阿弥陀という三字をば、おさめたすけすくうとよめるいわれあるがゆえなり」と示され、阿弥陀(仏)の字は、(阿弥陀仏

が)撰め、助け、救うといういわれがあると仰せられている。

そうすると阿弥陀仏とは、衆生を撰め(引き受け)、助け、救うて下さる力を用いるのである。

さて南無は帰命であるが、帰命について宗祖の思し召しから伺うと、帰命の「帰」は帰る、至るという意味の字であり、「命」は命令であるから、「帰れ」すなわち「帰せよ」の命令、「至れ」の命令となる。至れば来たれと同意であるから、帰命は「帰せよの命」「来たれの命」が帰命ということである。

なお、「命」は命令であるが、阿弥陀仏の命令なるがゆに(勅命)乃至は(仰せ)であると教示されている。

すると、南無・阿弥陀仏は(帰せよ、来たれと仰せ下さる阿弥陀仏)という意味になり、阿弥陀仏が(我に帰せよ、我が国に来たれ)と仰せ下さ

っている、そのみ言葉が南無阿弥陀仏なのである。

さらに宗祖は、「帰」には(よりのたのむなり)「よりかかるなり」の意味があると重ねてお示し下さっている。

そうすると「帰せよの命」とは「よりのたのむ、よりかかるの仰せ」いわゆる「たのむの仰せ」である。なお「たのむ」のたのむは、依頼するの頼ではなくて「まかせよ」「ゆだねる」の(憑)である。

であれば帰命とは「たのむの仰せ」「まかせよの仰せ」「ゆだねよの仰せ」という意味となる。

何にたのむ、何にまかせよと仰せ下さるのかというと、(南無・阿弥陀仏)であるから阿弥陀仏に南無せよ、阿弥陀仏をたのむ、阿弥陀仏にまかせよである。そしてだれ

《真宗入門講座》

(お勤めのおけいこと法話)

○テキスト 正信偈

毎月十八日 (午後六時半始)

担当 (副住職) 土井尚存

*勤行の練習と真宗の教えを基礎から学びます。どなたでもご自由に参加してください。

が仰せ下さるのかというと、阿弥陀仏ご自身が仰せ下さるのである。

こうして、この阿弥陀仏とは衆生を撰取して捨てないはたらき、引き受け、助け、救いたもうおはたらきであるから、南無阿弥陀仏は(たのむ、引き受ける)「たのむ、助ける」の仰せとなり、古来から南無阿弥陀仏の六字は(タノメタスケル)の義と言われてきたのである。

しかも、(タノメ・タスケル)というお心は、私たちに(たのんだら、助ける、まかせたら助ける)というような条件付きのお助けの心ではない。(マルマルタスケルカラ、タノメ、マカセヨ)という思し召しである。(汝のありべのまま、そのままを引き

受ける、助ける」という広大な無碍の大悲心を表されたみ言葉である。

だから、〈タノメ〉〈マカセヨ〉と聞いて、たのまねばならぬ、おまかせねばならぬという風に、私たちの方から、たのみにかかり、おまかせするにかかろうとするのは、聞きまちがいである。大体、私たちの方からは阿弥陀仏をたのむこともおまかせすることも全くできないのである。

そんな力も能力もないのである。むしろ、まかすこともできず、弥陀をたのむこともできない私だからこそ、それを知り抜いていたもう阿弥陀仏は〈たのむことのできないお前だからこそ我をたのめ〉と仰せ下さっているのである。〈そんなお前だから、まるまる引き受けるじゃないか〉と仰せ下さるのである。そういう驚嘆すべき大悲を伝えて下さるみ言葉が〈タノメタスケル〉という南無阿弥陀仏の仰せなのである。

であるから、この南無阿弥陀仏を称え聞くということ、は、〈まるまるタスケル〉の仰せを聞かせていただいでいることであり、広大な大悲を浴びていることになるのである。

る。

くり返すと、南無阿弥陀仏とは、阿弥陀仏が私たちに〈我が浄土に帰り来たれ〉とよびかけたもうみ言葉であるとともに、〈タノメタスケル〉の大悲の仰せである。

〈タノメタスケル〉を更に押し詰めると〈タスケル〉〈ヒキウケル〉の一句におさまる。これが真宗の南無阿弥陀仏の核心である。

この南無阿弥陀仏を称える念仏の声において、日々に大悲の仰せをお聞かせいただく。それがお念仏の生活である。お念仏を称えているままだが、〈タスケル〉〈ヒキウケル〉の仰せを聞いているのである。この南無阿弥陀仏を生涯かけて持続する、聞き続けるのが念仏往生の生活であって、これによって生死の問題、人生の根本問題（死と罪と虚無）が解決されるのである。南無阿弥陀仏は実に有難いお言葉なのである。

それゆえ釈尊は観無量寿経に「汝、この語（南無阿弥陀仏）を持て」と仰せになり、また阿弥陀経には「名号を執持せよ」とお念仏をお勧めになるのである。（了）

正信偈に学ぶ問答

(三十一)

如来所以興出世

唯説弥陀本願海

五濁惡時群生海

応信如来如実言

（書き下し文）

如来、世に興したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり。五濁惡時の群生海、如来如実の言を信ずべし。

（現代語訳）

釈迦如来様や諸仏方が世に出られるのは、ただ阿弥陀仏の本願の教法を説くためである。五濁の世の人々は、如来のまことの言葉を信じるがよい。

*

G 「今回は応信如来如実言について、詳しくお話し下さい。

まず応信如来如実言とは（如来の如実の言を信ずべし）といわれるのはどなたが誰に信ずべしと申されるのですか」
D 「それは宗祖にとつては釈迦如来・諸仏方が弥陀の本願

を信ずべしとおすすすめ下さる、と受けとられたと思えます。ですが、この宗祖のお言葉を聞く私たちは身近にはこの正信偈を書いて下さった宗祖が〈まさに信ずべし〉と仰せられていると聞かせてもらつていいのでしょうか」

G 「では信ずべき如来如実言とは」
D 「この如来とは釈迦如来および諸仏ということ、おさとりを完成された如来様方のお説きになった言葉は如来如実言（如来如実のみこと）といえます。ただここでは、前にも申しましたように釈迦如来・諸仏方がこの世にお出ましになった本懐は弥陀の本願を説かんがためですから、釈迦如来様がお説き下さった弥陀の本願の言葉を如来如実言と仰せられるのであります」

G 「如来如実言の如来とはまは釈迦如来様のことでいいのですね。では如実言とは」
D 「如実言とは如実のみ言葉

ということ、実の如く説かれた言葉ということ。さとの眼より、真実を真実の如く、虚偽を虚偽の如く、仮なるものを仮なるもののごとく、事実ありのままをその通りに説く言葉が如実言です。ただ先ほど申したように、ここでの如実言は、一切衆生が助かる真実が已に実現している今も万人にすでに働いている弥陀の本願の真実を、その真実の如く説かれた言葉ということです」

G 「ありのままの真実といつても、私どもの救いと直接に関係のない真実をここで〈実の如く〉といわれたのではないのでですね」

D 「ええ、例えば般若心経に説かれた言葉も真実を説かれた如来の如実言といえますが、般若心経の言葉、例えば〈色即是空〉などの言葉は、愚かで闇の中を彷徨し困窮している凡夫にとつては、あまりに高遠であつて、愚かな私どもの直接で具体的な救いはなりがたいですね。いまここで如来如実のみ言葉を信ぜよとお勧め下さる真実のみ言葉は、一切衆生がそれを信じればかりで今ここで助かる真

実を説かれた、そういう言葉
という意味での**如実言**なので
す」

G「そういう如実の言葉が阿
弥陀仏の本願の言葉なのです
ね」

D「ええそうです。そして、
釈迦如来様ばかりではなく、
諸仏方もつまるところこの弥
陀の本願を衆生に明らかに
し、説かれんがためにこの世
にお出まし下さった、と宗祖
は受けとっておられるので
す」

G「それで、正信偈では、仏
説無量寿経に説かれた弥陀の
本願という**如実言**を（まさに
信ずべし）と強くお勧めにな
るのですね」

D「ええ、そうなんです。そ
んなわけで、ここでいわれる
眞実は弥陀の本願の眞実であ
って、弥陀の本願の眞実はそ
れに依って本当に助かる眞実
であり、それを無視すること
によって自らを迷妄の闇に留
めてしまうような眞実であ
り、誰しもがその眞実にいつ
でも何らかの応答を迫られて
いる眞実であり、私にはそん
な眞実は関係ないとすること
のできない、極めて普遍的で
あって、今の私の存在と切り

離すことのできない眞実なの
です」

G「いわゆる物理学的な眞理
とか法則というものとは違っ
て、私の全人生がそこにかか
っているような眞実なのです
ね」

D「ええ、そういうえましよう」

G「では弥陀の本願はどのよ
うな眞実なのですか」

D「万人に働いている眞実そ
のものが、一切衆生を救うは
たらきとして形をあらわし、
言葉（御名）とまでなつて、
ご自身を示したもう、そうい
う眞実です」

G「（眞実そのもの）とは」
D「色もなく形もない眞実の
はたらきそのもので、それは
仏説無量寿経には光明無量
（光はかりなく）、寿命無量
（いのちはかりない）のはた
らきとして説かれています」

光明は智慧のはたらきであ
り、それは同時に慈悲のはた
らきですから、眞実そのもの
とは、智慧と慈悲といのちは
かりなきはたらきといえまし
よう。それを宗祖は
（**寿命延長、よく量ることな
し。**
**慈悲深遠にして虚空のごと
し、**

**智慧円満にして巨海のごと
し**）

とお示しになつておられま
す」

G「その眞実が、一切衆生を
救うはたらきとして形を取っ
てこられたというのは」

D「それはこの眞実が、仏説
無量寿経に依れば、法蔵菩薩
として世に出でて、一切衆生
を助けたい、仏にしたいとい
う広大な願いを起こされ、長
い間思惟され、そして四十八
通りの願を起こされて、この
願によつて一切衆生を必ず助
けることができると思通し、
永劫の修行を衆生に代わつて
なされ、すでに法蔵菩薩は十
劫の昔に阿弥陀仏になられて
いる。弥陀の本願は本願の力
として現実化し、衆生の（生
の依るところ）として浄土が開
かれ、浄土へ生まれしめる道
がお念仏として、すでに私た
ちに与えられている。ざっと
申せば眞実のはたらきをこの
ような弥陀の本願のはたらき
として、釈尊はお説き下さ
いました」

G「では、こうした衆生救済
のはたらきが言葉とまでなつ
て私たちに知らせ下さると

は」

D「弥陀の本願は我らに近づ
き、南無阿弥陀仏の言葉とな
つて私たちの口に称えられ、
耳に聞かして、阿弥陀仏ご自
身を私たちに示し、その広大
な大悲の救いを告げ知らせて
下さるのです」

G「いわゆるお念仏とまでな
つて、阿弥陀仏はご自身を表
現されるのですね」

D「ええそうです。そこまで
至れり尽くせりのご親切なの
です。極まりのない大悲心が
南無阿弥陀仏の御名となつて
私たちに広大な救いを現し、
お知らせ下さるのです。そう
いう不可思議のお手立てによ
つて、やつと私たち凡夫はだ
れでも今ここにはたらい下
さつている智慧と慈悲といの
ちはかりなき普遍的な眞実
にであうことができるのです」

G「そうすると如実言とは、
如来様の説かれた弥陀の本願
であり、その本願が南無阿弥
陀仏の名号の言葉となつて下
さつている、そういう眞実の
言葉のことなのですね」

D「ええそうです。それゆえ
その如実のみ言葉である南無
阿弥陀仏を応信（まさに信ず
べし）と仰せ下さるのです」

（了）

《臨時のお休み》

10月2日の座談会

は休ませていただき
ます。

《秋季彼岸会》

9月22日（水）

午後2時始まり

*法話の後、帰敬式を致します。帰敬
式ご希望の方は前もってご連絡下さい。



接骨木

信心夜話

《楽心院大量師に聞く》

楽心院大量師は江戸末期の大谷派の明師で、岐阜県出身。後に、滋賀県八幡町にある順応寺の住職となる。道心もあり学問もあつた厚信の方。師の言葉を本にして真宗信心にふれてみたい。太字が師の言葉である。

○他力の御法を聞く心得は、親様と云うことを忘ると益がない。嘆きに沈んで廣大不思議の御助けを聞き洩らすことになる。「もろともに語り合おさん法の友、機をつたなさと法のとうとさ」

(こういう法語は他の方からほとんど聞いたことはないが、確かにそうだと思う。道理は深くても温かい宗教感情の伴わない話からは、阿弥陀仏の慈悲心は伝わってこない。実感的に現在思えても思えなくても、阿弥陀仏様は私の救い主であり、永遠かけての大悲の親様であると聞き、そう受けとらせていただくことは大事なことであろう。親様、親様、お母さん、お母さんと、ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツとお念仏する。阿弥陀様を母の如くに慕い、あいたい、あいたいと思う。宗祖も「子の母をおもうがごとくにて衆生仏を憶すれば 現前当来とおからず如来を拝見うたがわず」と仰せになつて

いる。子が母を慕うような思いで阿弥陀仏を大悲の親様と想つて念仏する。そうすると間違いなく阿弥陀仏にあうことができる。

「我が名を称えよ」の仰せのままに、困つたらナムアマミダブツ、さびしかつたらナムアマミダブツ、やりきれなかつたらナムアマミダブツと、親の名を喚ぶ。いわば念仏する。そうすると「我が名を称えよ」と仰せ下さる慈悲心が伝わってくるのである。厚信のT師のお話に、ご本尊の阿弥陀様を拝むと、「ああ私をお助け下さる阿弥陀様」と思い、親様と拝み、極楽浄土と聞いたら、「ああ私のような者を迎えて下さるお浄土よ」と思い、お聖教を拝見すると、「私を助けるために書き表して下さつたお書き物よ」といただきなさい、とある。しかるに、仏法を聞いてもただ自分の悪や罪の深いことばかりを聞いて、阿弥陀仏の大悲を親しく聞かなかつたら、いつまでたつても自己批判ばかりで、広大な大悲にふれず、仏心にであうことができない。ただ自分のお粗末さを嘆くだけになりかねない。仏法は、自分のつたなさを聞くだけではなく、こんな私を我が子とみそなわし、我が名を称えよと情けをかけたもう如来様のお心を離さずに聞かせていただくのである。

○我等はこの世を夢と知つても、この心が夢と云うことを知らぬ。聞いて堅めにかかるから、御喚声が聞こえて下さらぬ。世は夢なれど、求める心は本性と思つてが誤りである。

(この世間は無常であり、うつろいゆく、はかない世界であつて、たよりになるものは何一つもない。まことなるものない虚仮なる世界である。このようにお説教でもずいぶん聞かされる。

しかし、こうした話を聞いている自分の心そのものが同じく夢のようにはななくてたよりのない虚仮な我が心であるとはなかなか知られないのである。それどころか、こういう火宅無常の世界の中で仏法を求めて聞いているこの私のまじめな心こそまこと(ここでは本性)と思つている。

そうして、この心に仏法を聞かせて、しっかりとした自覚だの信心だのを確立しようとし、またいつかはそうなれると思つて年月を送る。

しかるにいよいよ聞かせてもらつと、この世が夢・幻のような頼りない世界であるばかりか、それを聞いている私の心が実に頼りのない、うつろいゆき、しっかりとしない、まことに夢のようなまことのない心であることが知られる。こんな心に仏法を聞かせ、仏法を根付かせ、いつかはしっかりとした、安定した信心やら自覚ができると思つていること、そのことが大きな誤りである。世間も夢なれば我が心もまた夢である。「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はみなもてそらごとたわごとまことあることなき」(歎異抄)ものなのである)

○このままとは悪心だけのこと、信心ばかりは本真物にならねばならぬと思つて、よくよく聞けば本真物とて何がある。このうそいつわりのゴマノハイぞと聞き開かれたら一心帰命の外はない。

(心は、夢のように変わりどうしてたよりにならないばかりではなく、悪心だけ、いわゆる煩惱妄念だけのこと。この心に仏法を聞かせて、ほんまの信心にせねばならぬとするのは、この心にだまされているのである。この煩惱の心は世間の中で生活するには必要なものであるが、浄土に生まれる代物にはならない。浄土の真実に照らされると、この心はうそいつわりの煩惱妄念のかたまり。いつまでたつてもまことにはならない。たのみにちつともならない。この世ばかりか、一番身近なこの心が「そらごとたわごとまことあることなし」と知らされれば、《汝をタスケル仕事は弥陀が引き受ける、我をタノメ》の南無阿弥陀仏の仰せをただたのむ(一心帰命する)ほかはない。弥陀をたのまぬほうが難しい。

にもかかわらず、私はまだ仏智不思議を疑つています。だからだめです」という人がいるが、私の心の中の信心らしきものも仏智疑惑も、一切適切、お助けに役にも立たねば邪魔にもならない。この心は夢であり、煩惱妄念である。喜べても喜ばなくても、信じても疑つても、この心の有様に一切関係なく、《汝の往生はまるまる仏仕事ぞ、汝の心の明い闇い、善し悪し、信疑にはちりほども関係なく、我が力一つで汝をまるまる引き受ける》との仰せである。《そのままりで助ける》の仰せからはどんな人も逃げられない。つかまれてしまうのである。宗祖もご消息に《ともかくも、行者のはからいをちりばかりもあるべからず候えばこそ、他力と申す事にて候え》と仰せられてる)